

井土ヶ谷事件と遣仏使節池田筑後守

澤 護

幕末期，日本人浪士たちによる外国人殺傷事件は相次いだ。フランス人がこういった事件に巻き込まれたものとしては文久3年（1863）の井土ヶ谷事件があり，また警護の土佐藩士たちによって11名のフランス兵が殺害された慶応4年（1868）の堺事件とがある。

このふたつのフランス人殺害事件だけでも単純に比較してみると，幕末と幕府瓦解直後という時代の違いから両国の態度や対応にさまざまな差違が認められる。

本稿は井土ヶ谷事件のもたらした波紋から，池田筑後守一行が渡仏するようになった過程を書き留めることにした。また，横浜からマルセイユに至る船旅は最初の体験であり，見るもの，聴くもの，食べるものはいちいち初めて見聞するものであったから，彼らが他国の文化や慣習に直面したとき，どのような反応を示したのかを「青木日記」，「欧行記」や古老の談話などから再現してみたい。

(一)

1862年9月14日（文久2.8.21），3人のイギリス人とひとりの女性が馬で東海道を進んでいる途中，江戸から京都へ向かう薩摩藩主の実父・島津三郎の行列に遭遇した。4人のイギリス人のうち，上海の商売人で，たまたま日本へ観光旅行にやってきたリチャードソンと，香港での商人の妻であ

るボロデール夫人のふたりが先頭を進んでいたのは、ひとつの不幸であったといえるだろう。

大名の行列がどのようなものであるのか、日本の状況に疎かったリチャードソンらは、大名の行列に出遇ったら馬から下りるという礼儀もみせず、一行の内に馬に乗ったまま入っていった。特に、リチャードソンはボロデール夫人の注意に耳も貸さず、行列を組んだ一行の間に入り込んだり、列外に馬を乗り入れたりという振る舞いを繰り返していた。

リチャードソンは10数年に渡って中国に住み、かなり傍若無人の行動をとってはひんしゅくをかかった人物で、この時も彼の仲間がわき道に廻るよう叫んでもそれを無視し、逆に藩主の駕籠さえ道を譲らせようとする傲慢な態度をみせた。悲劇はこの時に起きた。後にいう生麦事件の発端だが、このリチャードソン殺害の知らせが横浜居留地に届いた時、居留民や各国公使・領事館に与えた驚きと興奮は一様なものではなかった。生麦事件はその後の幕府対各国外交団、薩摩対イギリスなどの間で、日本をゆさぶる大きな問題として進展していった。

いまだ生麦事件の記憶もなまなましい1863年10月14日（文久3.9.2）、日本とフランスとの従来親善を一気に打ち破りかねない事件が勃発した。世にいう井土ヶ谷事件がそれである。この年まで、狂信的な武士や浪人たちによって引き起こされた外国人殺害事件の犠牲者は、1859年（安政6）のロシアの2名の見習士官を初めとし、翌1860年（万延元）にオランダ人船長2名、さらにアメリカ人やイギリス人と無残にも切り殺されていったが、いまフランスもこの不運に仲間入りすることになった。

1863年10月14日、日本に来てまだ間もないフランス陸軍アフリカ第三連隊付き小尉（記録によっては中尉とあるがこれは誤り）・カミュ（Henri Camus, 1842-1863）は、二人の同僚士官と共にこの日の午後に乗馬を楽しみながら、横浜居留地から3マイルほど離れた武州久良岐郡井土ヶ谷村（現在の南区井土ヶ谷下町井土ヶ谷橋付近、ここに碑がある）にさしか

かった時、榎の大木が茂み昼なお薄暗い十二天の森に隠れていた浪人3人に襲われ、カミュは右腕を切り落され、さらに数太刀を浴びてその場で絶命した。

この残忍で野蛮な殺人を、当時の英字新聞「ジャパン・ヘラルド」紙(1863.10.17号)は次のように伝えているが、この記事は1880年(明治13)に『ヤング・ジャパン』(Young Japan)を刊行したブラック(John Reddie Black)の筆になったものであった。

「(10月14日)この日の午後4時頃、居留地から3.5マイルほど離れた井土ヶ谷という村で、ひとりの外国人の死体が発見されたという知らせが各国領事に伝えられた。

プロシア領事・フォン・ブランド(Von Brandt)は、アプリン中尉と護衛兵を率い、東海道の現場へと向かったが、フランス警備隊も直に彼の後に続いた。

フランス公使館のブレックマン氏(Bleckman)は二人の狙撃兵と田舎道沿に急ぎ、先行するアメリカ領事・フィッシャ大佐(Fisher)、ジェンキンス博士(Jenkins)、それに馬に乗った数人の日本人役人に追いついた。一行は同じ場所、保土ヶ谷へ向かっていた。この居留地から1.5マイルほどの金沢に向かって進んでいると、川にかかる橋向こうのほぼ20ヤードのところで、アフリカ狙撃兵第三連隊付き小尉・カミュ氏の恐ろしいほどに切りきざまれた死体が狭い小路に横たわっているのを目にした。

遺体の状態を述べるのは難しいが、およそ20ヵ所にわたる傷があり、そのいずれかが致命傷に至らせるに充分のものだったろう。片腕(手綱をとる腕)は完全に胴体から切り離され、手にはまだ手綱の一部が握りしめられていたが、その腕は死体から10歩ほどのところにあった。

村人たちはこの件に関して完全に口をつぐんだが、近くで3人の浪人

(2人は刀を持っていた)を見かけたという話をわれわれは耳にした。また、村人である老婆は、悲鳴を聴いて家から外を見ると、2人の男がすばやく道を横切り、その内のひとりの着物には、べっとりと血糊がついているのを見たとはっきり語った。

取り調べの役人は、この非道な殺人について手がかりはないと公言している。

カミュ氏はその午後いつものように、乗馬を楽しみに出かけたのだった。彼は全く武装していなかった。時には携帯した小型ピストルさえ所持していなかった。」

事件が起こった10月14日の翌日、号外をもって居留民に知らされた第一報だが、この事件によりフランスは横浜港に碇泊中の艦船から大勢の水兵を上陸させ、警戒体制をひいた。フランスはイギリスよりも早く、1863年8月に横浜の山手に駐兵権の獲得を目的として、アフリカ猟兵の小分遣隊(第三大隊の一部)を屯営させたが、カミュ殺害後フランス艦隊司令官・ジョーレス提督(Constant Louis Jaures)は外国人の保護のため、この地を維持すると宣言し居留地を見下ろす山手に三色旗を立てた。

不穏な攘夷派の動きに対応して、イギリス、フランス、アメリカなど各国は軍事的な手段に訴えてでも、これを排除しようとしていた。1863年10月初旬、横浜港に碇泊していた締約諸国の軍艦はイギリスが16艦、アメリカ、オランダ、プロシヤ各1艦、フランスのデュプレックス号(Dupleix)とセミラミス号(Semiramis)の合計21隻で、港は外国の軍港といった観を呈していた。これほどまで、浪士による横浜居留地に対する攻撃の風説は流れていたのであった。

カミュ殺害事件は、フランスに対し横浜居留地防衛のため山手に軍隊を常時駐屯させるという大きな口実を与えたことになり、山手186番の地所3,357坪が無償でフランスに貸し与えられ、ここにフランス守備隊300人が

まず駐屯した。(因に、この地所が日本側に返還されたのは昭和46年のことで、横浜市は買収に4億円もの金額を支払った。現在のフランス山公園がここである。)

井土ヶ谷事件と呼ばれるカミュ殺害事件について、横浜本町五丁目町名主・久次郎代人周作が書き認めた手記を、日本側の資料として紹介しておこう。

「(文久3年)九月二日午刻、武州久良岐郡井戸ヶ谷村地内に於て、浪人體之者三人、内二人は雪駄、一人はふく草履をはき、何れも赤堅縞平袴著し、右村名主市右衛門宅より立場之方へ二丁程之所にて亜國第三バタイロン一士官ロイテナント官名カミイ二十一才右場所通行いたし、浪人へ對し不禮致し候哉馬に乗り居候カミイを殺害いたし、疵所左之通

- 一 右の腕手綱を持候儘五、六間脇に有之
- 一 頭上左の鬢先四五寸
- 一 右之肩先より左之下腹迄

右に付井戸ヶ谷より急速届来御取締掛より御運上所へ御届、直に異人館へ相達、午下刻各国異人共、騎馬又は鐵炮を持、五人三人或は三十人、軍艦士官三十人ツゞ騎馬にて、何れも劔を帶し、其外我先にと驅附候者夥敷死骸改之上戸板へのせ、琉球疊をもって覆ひ緋羅紗服之異人三十人餘二行に列り、劔附鐵炮を持、右次に二十人程、馬上三行に列り、次に死骸四人にて荷ひ持、其次各国コンシール、ミニストル等、馬上二十人程附添、左右士官之者馬上三十人程、劔を抜持警固いたし都合百人餘、右前後は神奈川方同心通詞等附添、亜國ミニストル館へ申下刻引取直に、翌三日元村異人埋葬地へ埋る」

文中の「井戸ヶ谷」は「井土ヶ谷」、「ロイテナン」(中尉)は小尉、「亜國」は仏国の誤りであり、「ミニストル」(公使)が現場にはいなかった

など若干の誤謬はあるものの興味ある手記で、「浪人へ對し不禮致し候哉」と日本側の立場をとっている点などおもしろい。

横浜弁天のフランス公使館に安置されたカミュの遺体は、翌10月15日の午後4時に各国列強の外交団、陸・海軍に守られ本町通りのフランス教会へ運ばれた。ここで厳粛なるミサがとり行なわれたあと、セミラミス艦の吹奏隊による鎮魂曲に合わせて葬列は進み、千人をも越す人々に見まもられ山手の外国人墓地に埋葬された。かくして、カミュは山手外人墓地のフランス人埋葬者の第一号となったのである。

カミュ殺害の知らせが江戸表に届くと、老中はド・ベルクールにすぐに深い遺憾の意を表明し、この極悪非道の犯人の発見に全力を尽すと約束した。しかし、この事件も他の多くの殺害事件と同じように犯人逮捕には至らなかった。

事件発生直後、神奈川奉行・合原猪三郎義直は下手人の探索のため部下を現場に急行させ、付近の民家全てを対象に聞き込み捜査に当たらせ、犯人の検挙に全力をあげた。この捜査の段階で、犯人は3名ではなく2名だったという者、ある農家で草履を求めた浪人のいることなどから逃走後の足取りを探り、最後は甲州街道方面に逃がれたらしいことがわかっただけで消息はぷつりと消えてしまった。

カミュ殺害事件に対し、各国公使は幕府に厳しい姿勢で事件の処置に当たるよう要求したのはもちろんであったが、この事件後に居留民による自衛隊が編成され、さらにフランスやイギリス軍の山手駐屯に拍車がかかるという手痛い報いを幕府は受けることになったのである。また、居留民や旅行者もいかに日本刀が恐るべき凶器になるかを知り、金沢や鎌倉、あるいは川崎方面への遠乗りには、必ず数名が同行し、武器の携帯をするという神経の昂ぶりをみせるようになった。このように井土ヶ谷事件は、さまざまの面に波紋を投げかけていったのだった。

井土ヶ谷事件に対して、フランス公使ド・ベルクールは外国奉行・竹本

甲斐守正雅に内々にひとつの解決策を示した。それは謝罪のための特使派遣ということだが、これにはフランス公使館付き書記官兼通訳官・ブレックマンから竹本甲斐守に宛てた文久3年10月19日（1863. 11. 29）付の書簡がある。

「足下難澁の場合に臨て既に屢々余に相談を請し事あるにより即今大君政府と佛蘭西帝國政府との間にある行違の治るの仕方を足下に報せんため余今日足下に書す

其第一の仕方といふは長門侯の佛蘭西軍艦を襲撃せし事并にロイテナントカミュス（人名）の殺害せられし事に就き事情を辨解し落意せしめんためパイレスへ使節を遣すにありと見ゆ右殺害の一件ハ政府警衛の地内に於て起りし卑法の所業なるに依りひとり大君政府引受へき事なれば最甚しき事なり

若し大君の公族を遣ハすハ今に於ても難き事ならハ假令ハ足下従者と共に佛蘭西飛脚蒸気船を以てパイレスに赴き六ヶ月を經此地に歸り是を以て必ず不日に申越すへき嚴命を直に施すを暫く止めしむへし

日本政府此仕方にて都合能き次第猶多しといへとも茲に書するにたへす

此仕方足下に於て取行ふに難き事なくハ余は足下若しくは足下より遣す人に尚巨細の事を述へるの覺悟なり

余日本の爲め右回答を速に願ふ恐惶敬白

ブレックマン」

幕府はこと外交問題については常に難局に立たされていたが、カミュ殺害事件の起こる少し前の1863年（文久3）7月に、瀬戸内海を航行中のアメリカ商船が長州藩によって砲撃を受けるという事件があった。これに対して、フランス、オランダ、アメリカの軍艦による報復砲撃が開始された。

さらに8月に入ると、前年の生麦事件の後をひく平和的な解決が長びいてイギリスと薩摩藩は一戦を交えることになった。いわゆる鹿兒島戦争である。

こうした動きの中でカミュの殺害が起こったことから、加害者は当然の如く長州か薩摩、あるいは西国の浪人であろうと京極能登守あたりが口にしたが、下手人はとうとう捕えられることもないままに終わったので、幕府側の推測が正しかったかどうかは確かめようがない。

幕府はとりあえず殺害されたカミュに対し金1万両ほどの見舞金をだすことで、この件はひとまず落着きたいとの態度をフランス側に示した。しかし、いかに幕府に好意的であったフランスといえども、前年の生麦事件の賠償金のことが脳裏にあっただけに簡単に応諾できるものではなかった。フランス側の言い分は、昨年9月に生麦において島津公の行列にイギリス人が割り込んで殺された事件で、幕府は44万ドルもの償金をだしたにもかかわらず戦争にまで発展していったではないか。この英国人は一介の商人に過ぎないが、今回のフランス人の場合は例え同じ人間であるとはいえ、フランス国を代表する軍人であり、商人とはとうてい同一視することはできない。しかも、数10分の1の1万両でなんとか事を済まそうとするのは、なんとしても虫がよすぎる。事の重大さを認識してもらいたいというものであった。

生麦事件で幕府はイギリスの武力的な威圧に屈し、賠償金44万ドル（他に薩摩藩が10万ドル）という途方もない金額を支払ったことで大きな批判を浴びた直後のことであっただけに、それと同様かそれ以上の金額は到底だせるものではなかった。そこで、賠償金としてではなく、扶助金という名目でフランスに手渡そうと目論んだのである。

「一 井戸ヶ谷村に於而殺傷被致候ものゝ儀英國償金同様之事に相成候而者御不都合に付篤と佛國政府へ被仰入親族へ扶助金遣候丈けハ此

方より實意に申談候方可然哉に奉存候」

この資料は、池田筑後守一行が渡仏する2週間ほど前の日付を持つもので、池田筑後守の他に河津伊豆守と河田貫之助との連署になるものだが、生麦事件とは異なり幕府側の強い姿勢が表面的には読みとれる。しかし、これとて幕府とフランス側とでの、なんらかの密談があつたのことだったものと判断してよい。

フランス外交団としては、幕府から有力な全権をフランスに派遣させ、カミュ殺しの一件をナポレオン三世の面前で謝罪させることで一応の面子は立つ。これを賠償金とか扶助金とかいったことで事を荒ら立てては、これまでに培ってきたフランスと幕府の親善や提携に大きなひびが入りかねないので、ここはひとつ禍を変じて福となす考え方、つまり実をとる方策を講じたものと判断しておいてよいだろう。

カミュ殺害事件で、このようなひとつの大きな貸しを幕府側に与えておこうとする考え方は、初代駐日フランス公使のド・ベルクール (Duchesne de Bellecourt) の通訳官でありながら、彼の懐刀ともいわれたカトリック神父のメルメ・カション (Mermet Cachon) の進言であつたという (外交文書や彼の署名には 'de Cachon' と記載されているが、戸籍では 'de' はない)。

カションは正規の外交官ではなく、パリ外国宣教会に所属した神父であつたが、巧な日本語を操り外交の交渉には極めて長けた通訳でもあつた。しかも、ド・ベルクールの信頼は厚く、幕府とフランスとの懸け橋的な存在であつた。このことは、カションが一時帰国した時に、ド・ベルクールが次のように語つたことを示すだけで充分だろう。「メルメ (・カション) 師の離日は本当に残念なことである。(一部略) 日本人との長い間の付き合いから得た彼の判断は、今日困難な立場にあるわれわれを導いてくれる最も有効なものであつたのだが。」

さらに、ド・ベルクールの後を継いで駐日二代公使となったロッシュ (Léon Roches) も彼を重用視し、厚い信頼をおいた。しかし、ロッシュはド・ベルクールとは違い老練でしかも敏腕な外交官であったから、メルメの動向を疑問視しだすようになった。「メルメ・ド・カシヨンの情報には注意してかかる必要がある。彼は自分の利益になるか否かによって、全くあい矛盾する見解を述べるからだ」と指摘されるようになるのである。

幕府接近政策にひとかたならない誠意を示し、フランス外交団に大きな影響力を持ったカシヨンは、1865年(慶応元)春に日本との協力によって開設した「横浜仏語伝習所」の校長におさまり、横浜フランス領事館の一角に居留したが、この頃の評判はすこぶる悪く、神父どころか怪僧といった面をのぞかせている。

カシヨンは1864年にパリ外国宣教会を退会した(させられた?)が、彼には日本人女性の妾がいたらしい。このラシャメン(洋妾)は、資料によっては小田原生まれのお琴とも、駒込生まれのお梶ともいわれるが、自分の足では把握できない女性なので、ここでの言及はできない。しかし、女性がらみの問題で世間のひんしゅくを買っていたのは確からしく、さらに横浜居留地にあったフランス商社と結託して武器を輸入したりしていたのは事実である。この面は、横浜に住んだワーグマンの10数点にも昇るカシヨンに関するポンチ絵をみるだけで知れる。

西郷隆盛が慶応2年(1866)に書いた手紙の中で、「仏人のカシヨンと申者甚奸物にて幕夷の奸人之混と結居候」と決めつけているが、カシヨンは「奸物」であり、カシヨンと親交がありフランス派であった栗本 鯤(鋤雲)を「奸人」とし警戒すべき人物だとしている。これは、勝海舟も幕府の役人の中には宣教師であるカシヨンという妖僧に心酔する者がいて、なんとも困ったものであると日記にしたためているだけに、カシヨンの暗躍ぶりを示す傍証になるであろう。

さて、幕府はド・ベルクールやカシヨンの意向通りに、カミュ殺害の哀

悼を表明するためフランスに使節を送ることに決定した。しかしながら、この使節派遣には裏があり、その使節の真の目的は、フランスに英米が真向こうから反対した横浜鎖港という、とうていフランスでさえ認めない難題を力説するというものであった。

井土ヶ谷事件の謝罪をするための謝罪特使では表面上なんとも具合が悪く、とうてい攘夷論を抑えることはできないので、鎖港談判特命使節という形で攘夷論の沸騰を避け、あわよくばナポレオンの権力にすがろうという幕府の巧妙な策でもあったのである。

派遣される使節は、ヨーロッパの君主と会見するにふさわしい人物で、それ相応の位階を有する人であることとするとのド・ベルクールの進言通り、幕府は松平周防守、板倉伊賀守、小笠原図書頭、竹本甲斐守らが中心となって人選をしたが、この人選はかなり難行した。結局、外国奉行の中から、なんとか幕府の衰退を挽回し、中央の実権を確立しようとの野心を抱く、英気颯爽なる池田筑後守長発が選ばれた。

池田筑後守は盛んに攘夷論をぶつ28歳の果敢な人物だったが、横浜鎖港談判など到底その使命など目的は達せられるはずもないことは誰の目からみても明かだったから、一時的な朝廷や世間に対する糊塗とはいえ、なんとも損な役を引き受けることになったものであった。

派遣使節は従来慣行上、正使・副使・目付の三役は「守」と任官し、いわゆる親勅任官の資格で派遣されるものであったが、目付の河田貫之助が相模守に任官されるのは、池田一行が横浜出港の直前という混乱ぶりがみられたりしたから、国書づくりや荷造りに至っては、出港当日までずれこむといったかなり付け焼き刃的な出国であった。

もちろん、一行の出発に反対する者も多くおり、薩摩の島津久光などは一時の体裁のため使節を派遣するのは国家の損失であるから、途中からでも引き返ささせるべきだと一橋慶喜に談判さえした。また、越前の松平春嶽も反対論をぶったが、これら反対に対して慶喜は耳を貸さなかった。

1862年1月（文久元）の遣欧使節・竹内下野守一行がヨーロッパへ向かった時、イギリスは自国の軍艦・オーディン号（Odin）を提供したが、フランスも同じように今回の使節に対して自国の軍艦での旅を勧めた。しかしながら、日本側はこの申し出を断わり、当時フランスへの定期郵船が就航されていた上海よりフランス帝国郵船（Messageries Impériales）の便を利用することにした。1864年にはフランス帝国郵船はその航路をいまだ日本まで延ばしていなかったため、横浜より上海までの行程はフランス公使の好意を受け入れて、フランス東洋艦隊の一艦であったモンジュ号（Monge）に乗艦することになった。このようにして、池田筑後守一行を乗せたモンジュ号は、1864年2月6日（文久3. 12. 29）に神奈川砲台より17発の礼砲を受けて横浜港を後にしたのであった。

井土ヶ谷事件はカミュというひとりの士官を犠牲にしたが、日本側からも犠牲者をだすことになった。遣仏使節・池田筑後守そのひとこそ悲劇の人であった。

（二）

幕末に海外へ派遣された外交使節は、万延元年（1860）の遣米使節・新見豊前守一行、文久元年（1861）の遣欧使節・竹内下野守一行、文久3年（1864）の遣仏使節・池田筑後守一行、慶応2年（1866）の遣露使節・小出大和守一行、それと慶応3年（1867）の遣仏使節・徳川昭武民部大輔一行の5回である。

この内で、遣米使節や遣欧使節の資料や記録はかなりの分量が残されているが、とりわけ池田筑後守一行に関する資料は最も少なく、公式の史料はほとんど残されていない。この面は、28歳の血気盛んな攘夷論者であった池田筑後守が、フランスで洗脳され開国論者となって帰国したために狂人扱いをされ、帰朝後ただちに隠居を命じられ、副使の河津伊豆守と目付

井土ヶ谷事件と遣仏使節池田筑後守

の河田相模守が閉門に処せられるといった事態と決して無縁ではなかったものとみなされる。結論的にいえば、全く無駄で意味のない遣仏使節ではあったが、政治と離れて社会・文化史などの面から眺望すると、興味津々の点は数多くある。また、派遣された人物の追跡調査をすれば、明治初期に於ける外交、教育、政治などの面で活躍する人材が顔を連ねていることが知れる。

時の将軍・家茂は文久3年12月28日(1864.2.5)に京都に向け海路品川沖より出発し上洛したが、家茂よりは「横浜鎖港ノ儀ハ既ニ外國ヘモ使節差出候儀ニ御座候ヘバ何分ニモ成功仕度奉存候」との奉答があり、翌29日に出航した一行の氏名は下記の通りであった。

正使	池田筑後守(28歳)
副使	河津伊豆守(44歳)
目付	河田相模守(30歳)
外国奉行支配組頭布衣	田辺太一(37歳)
勘定格調役	田中簾太郎(22歳)
調役格通辯御用頭取	西吉十郎(37歳)
徒目付	斉藤次郎太郎(34歳)
調役並	須藤時一郎(32歳)
調役格通辯御用出役	塩田三郎(19歳)
小人目付	谷津勘四郎(31歳)
小人頭格小人目付	堀江六五郎(37歳)
定役元締進物取次上番格	益田鷹之助(28歳)
定役	杉浦愛藏(25歳)
定役	横山敬一(仏国デ逝去)
同心	矢野次郎兵衛(15歳)
定役格同心	松濤権之丞(38歳)

通辯出役	尺 振八 (23歳)
通辯御用当分御雇	益田 進 (16歳)
御手附翻譯御用出役	山内六三郎 (27歳)
蕃書調所出役教授手伝海陸軍兵書取調出役	原田 吾一 (34歳)
池田家来	小泉保右衛門 (38歳)
	大関半之助 (40歳)
	浦上 佐助 (26歳)
河津家来衣裳方	岩松 太郎 (23歳)
	別所左二郎 (25歳)
	高木留三郎 (27歳)
河田家来	玉木 三彌 (23歳)
	菅波 恒 (20歳)
田辺内	三宅 復一 (16歳)
田中内	名倉了何人
西 内	森田 彌助 (39歳)
齊藤内	浦木 時藏 (20歳)
一同心小使	益田 進
理髪師	乙骨 亘
	青木 梅藏

以上一行34名

外に和蘭生れの佛人 ブレッキマン

ブレッキマン (F. Bleckman) は江戸のフランス公使館付き書記官兼通訳官であったが、仏英語のほかに日本語もできるという便利さから、案内・通訳としてフランス公使が付けてよこしたものであった。もちろん、これには日本人一行の行動を、逐次フランス側に報告させるという別の使命があった。一行がフランスに到着してからシーボルトが付き、さらに薩

摩と深い関わりを持つモンブラン (Comte Charles de Montblanc) が接近してきて、後に面倒な外交問題を惹き起こす暗闘がここできりひろげられた。通訳として日本人一行に加わりながらも、裏に回ればフランスとイギリスとの実に複雑な駆け引きと葛藤とが、これら通訳官を通して見え隠れする。

フランス艦・モンジュ号に乗船した池田筑後守一行は、横浜より上海までフランス側の費用で送ってもらい、賄の方も先方持ちであったが、上海に到着するまでの一週間というもの「地獄の責も是には過じと思ひたる」苦しみを味わった。なにしろ軍艦は旅客船とは違って、特に客間・寝室などがあるはずもなく、ただ甲板に畳を敷いた上での寝起きであったし、まして家来たちに至っては「焰硝置場」に荷物を積んで、その上に板を渡したただけの臭気の立ちこめる暗い場所があてがわれたこともあって、すぐに船酔いを起こし嘔吐の連続であった。艦が波に翻弄されるたびに、板の上で息もたえだえの一行は転げ落ち、その都度フランス人乗組員には笑われるという有様であった。

この折、一同心小使として父・益田鷹之助に同行した益田 進とは、明治の実業界で大立物となる男爵・益田 孝で、彼は後に「上海までの困苦は實に名状すべからざるものであった」と語っている。苦辛は艦内の部屋のことだけにとどまらず、三度三度の食事もまた苦しみの原因であった。

艦内での食事は、日本食でなく洋食を提供するという取り決めであったが、一行のほとんど全ての者がパンと牛肉の食事は初めてのことであり、「パンは何とやらん気味悪く、牛は猶さら」というわけで、数日間のあいだ食事を一切口にしない者、食後に「腹工合悪敷」なる者は続出した。

この洋食はなんとかならぬものかと神仏に祈る者、少々乗船の折に餅を懐に入れてきた者はそれをかじって飢をしのぐ有様で、「色青ざめ、ひょろひょろと致し、さながら此の世の人とも思われぬ」奉行まで現われ、「せめて粥にてもほしく思へど」と歎息するさまは、われわれの想像を絶する

ものがある。

このような空腹飢餓状態の中で、理髪師・青木梅蔵は艦内に運び込んだかこい米より少しを掴みだし、水がないためさんざん苦勞したあげく海水を吸み上げて、それにて粥のごときものを拵え、奉行や家来連中に振る舞ったが、その時の様子を「皆々右の粥を食する有様御奉行はじめ乍憚乞食の飯臺に付きたる如く也」と日記に認めている。

日本人一行のこんな勞苦をよそに、モンジュ号は予定通り2月13日（文久4.1.6）に無事上海入港をはたし、一行はここでのホテル・「アスター・ハウス」（Astor House）に投宿して、屋上に日本国旗を掲げた。このホテルには、香港へ向かうフランス郵船を待つ間1週間ほど滞在したが、一行のひとりがホテルの廊下で詩を吟じて中国人の乞食と間違えられ追い払われるという一幕もあり、また国禁を犯してヨーロッパへ密航を企てた薩摩藩の上野景範（後の公使）と出遇うといったこともあった。

上海まで至る行程の中で、一行は大変な椿事を経験するが、およそ文明とか文化とは、このようなものを指すのではあるまいかと思える珍事を紹介してみたい。

「爰にわれながらはづかしき一奇事あり、其譯はわれ小便を致さんと雪隠へ行、既に事果て手を洗はんとかたへを見るに、其形瀬戸物にして蓋あり。いかにも美々しき水鉢、棚に据へ置けり、外に手を洗ふ物も無之ゆえ、右の蓋をとり一見せしに、少々ばかりにごりたれども水あり、兼て此邊の川水、皆泥水故斯の如くならんと思ひ、直様手を清めけり、然るに何やらん臭氣の致しけるゆへ、御通辯に右の由委細相尋候處、御通辯吹き出し給ひて、それはけしからぬ事なり、右うつはは異人の小便溜なり、異國は凡て斯様のよし承り、己も膽を潰し、異人の小便にて手を洗ふたるは我一人ならん可可笑しき事、且つ腹立し」

幕末日本のエピソードを代表するような珍談だが、これはひとり青木梅蔵だけの失敗ではなく、奉行を始め大半の者が異人の小便という洗礼を受けたのであった。西洋式の便器などみたこともない一行であれば無理もない話だが、このような話は今でもビデで洗濯したとか、そこで大便をして洗れず後で難儀したとか耳にすることもあるだけに、彼らの失敗を笑ってばかりいられない。

食事前に手を洗い、ナイフとフォークで肉をつまんで鼻のところに手がくると異様な臭気がして、どうにも合点がいかぬとした一行に、その手を洗った瀬戸物の小壺が実は小便壺であることを教えたのは、19歳のフランス語通訳の塩田三郎であった。塩田は若くして函館などでカションについてフランス語を学んだ英才だったから、西洋の事物についての知識はあったものとみえる。彼は後に横浜のフランス語学所の教師となり、さらに北京公使として登用されるようになるが、49歳という若さで夭逝した。

フランス郵船がレオン・ロッシュの肝煎りで、その航路を日本まで延長したのは1865年9月のことだが、上海までは1863年中にすでに定期郵船を就航させていた。池田筑後守一行が上海で乗り込んだ船は長さ100メートルほどのイダस्प号 (Hydaspe, 580トン, 240馬力) で、各人それぞれ2, 3人部屋が割り当てられたから一行の印象は、「前船より一段美麗にして諸事残る所なし」と満足の意を示している。

イダस्प号をはじめ東洋航路に就航していた郵船は、一般に3本マストに一本の煙突を有するタイプで、航海中はなるべく帆走して燃料節約をはかるものではあったが、蒸気機関で自走できるというのは、やはり当時の人たちにとって新鮮な驚きであった。

一行は1864年2月20日 (文久4. 1. 13)、上海でイダस्प号に乗船し、同号は翌21日に香港へ向け出航した。

「此の飛脚船は軍艦に引替へ、綺麗なる事申す迄もなく、割烹手を盡

し、酒菓豊饒、其他諸事望外に出で、其上聊か航海に馴れ染めし故、初めて洋食の濃厚にして一口二口は舌に好きを覚ゆ、前途の労苦やや減ぜし心地す」

横浜より上海までの軍艦での生活が地獄の責め以上のものだったから、大型の清潔な船に乗れたことでやや安堵の色をみせ、到底口に入らなかった洋食にも多少は慣れ、なんとか彼地までたどり着けそうな気分になっている。それでも、誰もが初めての大陸旅行ということで手廻りの荷が極めて多く、それを各自が部屋に運び込んだから、室内は窮屈で身動きもとれない部屋が続出した。

洋上はおだやかな波間が続き、船中閑暇ありというわけで、「洋製の樂碁を借受く昨今晝夜碁戦盛」んとなった。つまり「チェス」を楽しむ余裕がでてきたわけで、この技に早く長けたのは池田筑後守と田辺太一のふたりであった。

2月24日（文久4.1.17）一行は無事に香港に入港し、ここで幹線用の大型郵船アルフェ号（Alphée, 1551トン, 1075馬力）に乗り換えた。香港では2日間滞在したが、いずれも船中に宿泊し、この間に鎮台見物などを行っている。この折、先に触れたメルメ・カションが訪れてきているが、どのような話し合いがなされたものか記録は一切ない。カションがどのような行程で香港入りをはたしていたものか、またこの後で再び日本に戻ってきたものか、その足取りは把握できていない。

アルフェ号が出航する直前、この地で洋銀をイギリス・ポンドに両替えする方が有利だとして、横浜で買い入れてきた洋銀（メキシコ・ドル）をポンドに引き換えている。「金銀一枚に付代わりメキシコドル四枚三十六セントの勘定に相当」したというが、漠然として計算できない。ただし、この「金銀一枚」をイギリスの1ポンドとすれば、1ポンド=4ドル36セントと推定することが可能である。

生麦事件の折の償金44万ドルは10万ポンドに相当し、約33万両に匹敵したから、この時期の相場の変動は大差がない。これが、1867年の徳川昭武の渡仏の節の貨幣交換比率は1ポンド=4.1ドルとなり、1両は1.33ドルであった。さらに、1871年の岩倉遣欧使節の比率概算を示すと1ポンド=5ドルで、日本の4円50銭と計算することができる。このような時代の変遷や国力によって変動する交換比率は、大きな興味ある要素を提供している。

香港での2泊はいずれも船中泊りであったが、これは香港でのホテルは盗難が多いと聞いていたからと思われる。明治5年に東本願寺の法嗣・現如上人に同行して航遊の旅にでた成島柳北は、その書『航西日乗』で「香港盜賊多キヲ懼レ皆本船ニ還リテ寐ス」と書き、香港でホテル（客館）に投宿しなかった理由を語っている。

1864年2月26日（文久4.1.19）夜、一行を乗せたアルフェ号は香港を出航、数多い島嶼を経過して大洋にでたが、先のイダस्प号より倍以上も大きな郵船で、しかも浴室付きということで誰しもが喜んだ。お湯のだし方を船長に教わり、「冷水變じて湯に成る。湯の温熱適意の所は自己の手加減次第にて自由を得」と海水が蒸気機関によってたちまち湯になることを驚嘆している。ここでは、もうひとつの進んだ文明に触れ、なんとも便利なものとの感慨を覚えたのである。

日本では厳寒の気候といえども、香港を出航した直後から暖気が増し、夏着は全て船底の荷物の中のため、冬着姿の一行は大いに難儀した。なんとも凌げぬということで、荷物倉を開けてもらい、各自手短かに単物や小袖を取りだしたが、この荷の中に池田筑後守が積み込んだ酒一樽を発見し、早速その夜の夕食にそれが振まわれた。横浜を発って3週間ぶりの予期せぬ日本酒とあって、「實に仙人掌上の露を嘗る心地」と驚喜した。しかも、この夜の食卓には「氷に卵を和し砂糖を加味せし珍物を玉盤に盛り出さし」たから、最高の食事となった。この「珍物」とは、アイスクリームであったことはいうまでもない。1864年のこの時期、横浜の居留地とはい

えども、アイスクリームの専門店はいまだ開業されていないだけに、初めて口にした一同が「一匙の甘味得を云はれず」と感激するのも無理はない。

南下するにつれて船中の温度は「寒暑計」で80度（27℃）を越すようになり、食欲も落ちていったため朝夕二度の食事とし、昼はおやつ程度で済ませることになった。

航路もこのあたりまで来ると、闇空に南十字星の輝きがみてとれたはずだが、星には全く関心がなかったものか、その記述はない。それでいながら、一行のだれかがオランダ人夫妻の美しい奥さんに堂々と近ずき、船中で一波乱起こすに至るには脱帽のほかはない。この辺の行動たるや、謝罪のための一行という感じからほど遠いものがある。

3月1日（旧暦1月23日）、兩岸にシュロヤソテツの大樹が茂り、うっそうとしたジャングルの緑の中を船は進み、一行はサイゴンに到着した。この地はフランス領ということで堤督を表敬訪問することになったが、その際に前後を騎兵が護衛する馬車に乗ったことで大いに満足の意を示している。

3月2日、満潮を期して船は動き、次の寄港地シンガポールへ出港した。この地で使節はフランス（領事）館を訪問しているが、特別な感想はない。港近くは郵船の停泊のために築いた区割で、石炭庫ばかりが連立していたところであり、しかも1日だけの滞在であったから墓地見物ていどで終わったのであろう。

3月5日（旧暦1月27日）、アルフェ号はシンガポールを発ち、3月10日にセイロン島に到着した。セイロンといえば一般にコロンボを連想させるが、コロンボはかなり遠浅で郵船の停泊には適さず、フランス郵船の場合は1882年（明治15）6月までポワント・ド・ガル（Pointe de Galle）を寄港地と定めていた。アルフェ号が寄港した港も、コロンボではなくもちろんポワント・ド・ガルであった。

ガルはいわゆる天竺の地であり、巨大な釈迦の臥像やさまざまな寺の多

い地であったから、釈迦如来の寺を訪れて「西方浄土へ入たる心地にて感涙袖をぬらしけり」という者もいれば、「廢寺多く佛像なども粗悪」と失望するものもいた。

アルフェ号より上陸するためには小さなカヌーに乗らなければならず、この横の幅が極端に狭くて長い小舟を珍しがっていたが、この船頭が船の均衡を取らなかつたり、なかなか陸地に近づけず金を要求したため、抜刀して一喝する一幕もあった。

ガルは妓肆が多いところだが、一行の若い者たちは現地の案内人にさそわれるまま怪しげな二階家に上がり込んで、「黒き顔へ赤きものをはり付た」女郎三人と会って、その臭気にめんくらった。「斯様に人畜わからぬ者を妻として子を産むことあらば、東都兩國橋へ見世物に出しなば大當り疑ひなし」と哄笑し、もう完全に旅慣れた旅行者の一面をみせるのである。

椰子の木を珍しがり、甘美な椰子水を満喫した一行は、またしてもこの地で船を乗り換えることになった。乗船してきたアルフェ号はガルとカルカタを結ぶ航路に配船されることになったため、丁度スエズに修理のため向かうことになっていたエリーマント号（Erymanthe, 1293トン）に乗船した。

エリーマント号は1864年3月12日（文久4.2.5）ガルを出港し、今回の最も長い行程の約2500里も離れたアデンへと向かった。このインド洋は、ひとたび荒れるとその浪たるや数階建ての家屋と地面との間を行き来するほどのものだが、幸い風の日が続いて詩句会を催し、徒然を慰むほどの余裕さえみせた。句会での佳作は、池田筑後守、河田相模守、後に初代駅逦正となる杉浦愛藏（讓）らに多かったという。

3月19日（旧2月12日）一行はアデンに到着したが、この地は緑が少なく砂礫ばかりであった上に、土地の人間の品がよくなかつたため、どの旅行者の印象もよくない。青木の表現を借りると「我日本の神楽面にある外道とかいふに似たり」という容貌となる。

3月26日（旧2月19日）、長途の航海からやっと解放され、東洋航路の起（終）点のスエズに到着し、生れて初めて汽車というものを経験した。「鐵の棒を一面に敷たる」道を蒸気車が走るのも不思議なら、ここで初めて見聞する「テレグラフ」が「千萬里の遠きをも一瞬の間に達す」るのに目をむいたりする。

スエズよりカイロまでの距離は約140キロで、今なら2時間半ほどで行けるが、当時は4時間を費やした。それでも、「飛鳥の如し」と語るのは、正に実感であったろう。竹内下野守一行がやはりこの汽車を利用したが、その内の誰かが車中で食べた果物の蕊を外に投げ棄てたところ、それがはね返ってきて盛んに首を傾しげたが、ガラスなど見たことがなければ、これも無理がない。

スエズからカイロまでの間で汽車は二駅に停車するが、これは乗・下車のためよりむしろ乗客の下の用のための停車であった。つまり、停車中に用をたしなさいというものであったが、これを知らない一行は発車後に「兩便にはほとほと困り入り、中にはどうしても我慢ができず、「車中にて大便を山盛に致せし人」さえ現われる有様であったから、相当の強者もいたわけで、旅の恥はかき捨てなどはもうこの時代にはあったわけである。

アレキサンドリヤで乗船する郵船の都合で一行は約2週間もの間カイロに滞在し、国玉に謁見したり、また招宴が催されたりしてエジプトでの滞在を楽しんだ。この間、市中の浴場に出かけて日本の風呂と比較したり、婚礼や葬儀も見物し、「西瓜と梨子とを一つになしたる」味の「バナニ」を食べ風味佳しと云ったりしている。

4月4日（旧2月28日）一行はピラミッド見物をし、さらにスフィンクスの前で記念撮影をした。陣笠姿の侍がスフィンクスの下で取った写真が残されているが、彼らこそピラミッドなどを見た最初の日本人であった。

「石造の大像あり、顔面より乳上まで現れ、以下は土中埋没す、面潤く

方五尺程、又此邊土砂中より銅石造りの古佛、錢幣など往々に拾ひ取るものある由」

カイロでの観察は細かいものがあるが、先を急ぐことにする。一行は4月8日にカイロを発ち、翌9日（旧3月4日）アレキサンドリヤから海路マルセイユへ向かい15日（元治元年3月10日）の午後3時に入港した。

マルセイユは今まで数多く寄航してきた国々の街とは大いに異なり、美しい市街の樓閣が空に聳え、いかにも繁栄している景観が船上からでもみてとれたから喫驚し、なぜ日本とはこうも違うものかと今度は悲嘆にくれるのである。マルセイユあげての大歓迎は、次のように綴られている。

「海岸を望見するに、今にも發砲すべき兵隊、凡そ一萬五千人程、いずれも劍を抜持ち騎兵も多人数にて待もうけたる有様、あわや此船みじんにならんと生きたる心地なくあきれ居たりしに、御通辯お出ありし故、右の體を尋ぬるところ、大に笑はれ、是は佛國より日本使節へ饗應の禮なり、心を落つけて見物せよと仰せられ、是を聞て始めて蘇生の思ひをなし」

上陸後は十輛の馬車に分乗し、軍隊の警護する中を行進して、宿舎に当てられた「オテル・ド・マルセイユ」に入った。先ず、このホテルの宏麗さに驚き、次に四階や五階からいちいち一階まで歩いて下りて、食事をしなければならぬことに難儀するのである。

数日間のマルセイユ滞在中、一行は植物園、博物館、芝居見物をし、夜中に街中にでてその明るさに異様ささえ感じた。日本やエジプトのように「提燈を用ふる人なし」と驚くその明るさとは瓦斯燈だが、明治初年以前に洋行した日本人は誰もが「夜も晝の如し」とか「夜ヲ照シ白晝ニ異ナラズ」とこの瓦斯燈に目をまるくして文明というものに魅かれていった。

4月17日（旧3月12日）マルセイユからパリへ汽車で向かったが、途中のリヨンで小休息をした。この途中でいくつかのトンネルを抜けるが、その数「七つ通り抜けたり」と書いているから、小学生が遠足でやるように、車中でひとつ、ふたつと数えていたものとみえる。「人業を以て箇様の山々抜きし事、誠に恐しき事」とトンネルには驚きの目を向けてもいるだけに、その観察は詳細に渡っている。

翌4月18日にパリに到着した一行は、「グランド・ホテル」に宿をとったが、このホテルはマルセイユで驚いたホテルとは段違いの世界一のホテルと称されもしただけに、ただただあきれはて、しかも寝室は美麗宏大、寝具はふわふわとあって、「實に我等には過分にてよくも寝られず」とあいなった。

パリに着いて1週間目の4月26日（旧3月21日）、病気を患ってマルセイユに残った定役の横山敬一が逝去したという悲報が届けられた。彼の病状はいちいち電報でパリまで報ぜられていたが、この電信や郵便がこのように便利なものだということを知った一行の杉浦愛蔵は、明治に入って郵便制度の創始に努めたのであったから、横山の死も無駄にはならず、大きな文化を日本にもたらしたことになる。

池田筑後守はナポレオン皇帝に謁見し、国書を捧呈し、口上を述べた。謁見後に御土産の大和綿、太刀、蒔絵の箆筒などを贈り、その夜は皇帝の宴に招かれた。この招宴では、前の日本使節（1862年の竹内下野守一行）が贈ってあった「養老酒」がふるまわれたという。

パリでは大觀兵式に招かれ、造船所や動物園を訪ね、さらに軽気球を見たりしているが、これらを紹介する紙幅はもうない。動物園でカバについて驚いている様子だけを示すにとどめておく。

「二間四方の池ありて其中に二尺廻りもあらんという黒岩あり。然る處守り人大なるパンを持来り此池へ投入たりしに、こはいかに彼岩大な

井土ヶ谷事件と遣仏使節池田筑後守

る口を開き、只一口パンを吞たり、おのれ思はず一間計後へひさり、そのさま首斗りを出し全身をみせず、面は神楽獅子の如くにて真黒なり、何という物にや更に不分。」

カバがいつ頃に日本に輸入されてきたか不明だが、「河馬」という漢字を当てたのはいったい誰だったのかという余計な関心もでてくる。

1864年4月18日（元治元3.13）にパリに到着した使節は、その一週間後の4月25日より外務省や外国外交団に接触し、外務大臣ドルアン・ド・リュスと会談しては横浜鎖港の談判に入っていたが、この折にカミュ事件謝罪のためカミュ遺族と会う機会をつくってもらうむね申し入れた。丁度この頃、カミュ夫妻はパリのあるホテルに滞在中であったことから、通訳のブレックマンを仲介として面会を求めたが、我々はたまたま旅行中の身であり、日本の高貴な使節と会う栄は辞退したいと断われている。父カミュは砲兵大佐の背書きを有した軍人であったためこのような謝辞をしたものか、フランス側の外交を有利にするための策であったかは検討することは可能だが、父カミュの1864年5月6日付の書簡を引用しておこう。

「日本使節台下カムス之家族を尋問被致度との趣を申述べられし旨をマードム、シヨレスより予に申送れり予か妻を始め悴并予等深く推察せし處今我等か悲傷する凶暴なる殺害一件に付猶其時之事情を委細口述せられんかため来訪あらるゝことゝ思へり此節マードム、カムスにも猶憂苦に打沈若し面晤を得は其許之知らるゝ通り自然夫より一層之憂愁を生し其悲に堪へざるへし且我等偶然巴里斯に來り旅寓中之事なれば右様高貴之人の接遇すへき相應之設なく使節之我等を尋問せらるゝの榮を辭する事是又不得已次第なり

其許使節に面晤し此事情を厚く申述べられ予か愁意をも通解し給はるへ

し且被遣し貴品は末永く使節之意衷を表し所持し傳ふへし謹言

巴リスワルモール旅館に而認

コロネル

カムス

日本使節附属書記官兼通辨人

ブレッキマン貴君江」

これとは別に、使節は外務大臣と会談して、カミュ殺害犯人を目下探索し、逮捕の上は厳罰に処すことを伝え、カミュ遺族に対する扶助金を与える意向を示し、その金額の提示をフランス側に示した。これに対して、フランス側より二度とこのような殺傷事件は起こさないこと、万一このような事件が再発するようなことがあれば軍隊を出動させるという強硬な表明があり、扶助金として15万フラン（約18,750両）の金額が示された。

日本側使節はこの15万フランの額に内心では安堵し、3万5千ドル（192,500フラン、約24,000両）を支払う意向を示したため、カミュ殺害事件に関する会談は1回で終り、上記の金額がカミュ遺族の元に届けられた。これには1864年5月31日付けの扶助金の受領証書が残されており、さらにカミュ父の感謝の書簡が伝えられている。

「巴リスにおゐて千八百六十四年六月五日

君、

外国事務ミニストル依之六月朔日附之書簡ニ而日本政府にも我か長子を凶暴に殺害せし事之始末に付深く心配ありて其愁意を表し日本使節より右家族扶助金として三萬五千ドルラル之高を遣はされし旨を承知せり

使節台下にも了解あらるゝ通り譬ひ扶助金を受るとも愁意猶是までと替りなく擧家永く悲情に堪へざるへし乍併又我か情を憫まるゝ之證を得て聊か我愁を慰し我に在るも深く敬謝する旨を其許能く申述べられたし其許周施之勞又多謝す謹言

コロネル カムス

日本使節附属通辨人

「ブレッキマン貴君江」

多額の見舞金を戴こうと、殺害された息子への悲しみは減るものではないとする父の心情は察するに余りあるが、カミュ事件に関しては意外に早く片が付き、使節の最大の目的である横浜鎖港の談判へと入っていった。

1864年5月から6月にかけて使節は前後9回に渡ってフランス側と会談を持ったが、フランス側は使節一行の訪仏をカミュ事件と下関におけるフランス艦への謝罪のための遣使との見方を取っていたため、2ヵ月に及ぶ談判も空転に終わった。横浜鎖港などに微塵も意に介さないフランスは、逆に関税の撤廃といった提案をする有様であった。河田相模守の談話を知ると、この一行との会見は全く問題にしていないフランス側の態度がみてとれる。

「談判の様子は至って手軽なもの、外務省に参ると外務卿一人で、種々文書があって取扱って居る、其側に行つて話すと、用を仕ながら聞いて居る様な事で、用を仕舞てからはストーブの前へ椅子を持って来て其處で話して、次の間に書記官が一人居る位で、静かなもので驚きました。誠に手軽でござります。」

使節一行を派遣するのに大騒ぎをした日本のことなどはなから問題にせず、フランスに来たければ勝手に来たらい、談判の儀は適当にやろうという様子であるから、いいようにまるめ込まれてしまった。先に示した談判の様などは、まるでお茶でも一杯飲んでいらっしやいというようなものである。

このようなフランス側であってみれば、なん回会談を持ったところで実りがあるはずもなく、ただ一通の約書を交換しただけで鎖港問題は失敗に

終った。このため、一行はフランス以外の諸国を歴訪することもままならず、急遽帰国することに決めた。

1864年6月20日（元治元5.17）奉行らはパリを出発し、6月29日にマルセイユで今度はイギリス郵船（P. & O.）に乗船した。フランス郵船に乗らず、イギリスの船を利用したあたりフランスに対するせめてもの抵抗だったわけである。

イギリス郵船も往路のフランス郵船とほぼ同じコースを南下し、使節一行と通訳官・ブレックマンを乗せたガンジス号（Ganges, 704トン）は1864年8月19日（元治元7.18）の朝に横浜港に入港した。

この時の国内情勢は攘夷熱は高潮に達し、さらにこの数日後には長州藩主征討の朝命が下り、英・仏・米・蘭の四ヵ国艦隊が集結して下関を砲撃するという波乱の時にあった。こんな状況を知らない一行は、とうてい攘夷は不可能なことをまず朝廷に進言するか、それとも幕府に復命するかなどを話し合っていた。

池田筑後守が横浜に上陸するとすぐ外国奉行がやって来て、いま江戸には入れないことを告げ、一行を函館回しにする意向を示した。これを無視して池田は馬で江戸へ向かったが、その途中で竹本隼人正と栗本安芸守とに出会い、ふたりの説得により池田は將軍への復命を断念した。

8月23日（旧7月22日）、とにかく池田は歸朝の趣意を辯明し、鎖港は到底不可能であることを進言し、なおかつ各国と條約を結ぶべきであり、さらに各国へ留学生を派遣すべきことなどの建白書を提出した。すっかり開国論者となってしまった池田筑後守はその日のうちに押し込みとなり、禄を半分に減らされた上に隠居を命ぜられ、その後は精神が落ち着かないとの理由で岡山へ帰され幽棲の身となった。河津伊豆守と河田相模守もお役御免、閉門という重い処罰を受けることになったが、彼ら2名は1年ほど後に再び召出された。しかし、池田はそのまま幽棲が続き、1879年（明治12）に42歳で没した。

28歳の若さで遣仏使節の正使に選ばれた池田筑後守としては、若くして功名を焦り身を誤ったわけだが、カミュ事件の解決などは本来なら外交問題としてド・ベルクール公使が事に当たるだけで充分だったのに、フランス側にうまく言い丸め込まれてわざわざフランスまで謝罪に逝き、帰国してみれば狂人扱いとなんとも不運な遣使であったわけである。

これから5年後の1868年（慶応4）に堺事件が起こるが、幕府崩壊前後のことだけに、この対応は井土ヶ谷事件とはかなり異なった面を示している。これについては、稿を改める。

参考文献

- 『幕末外国関係文書』
- 「青木日記」
- 「欧行記」
- 「遣佛使節池田筑後守」（尾佐竹 猛）
- 「Japan Herald」（1864）
- 「Mémoires et documents, Japon 1854-1870」